

## ハラ ミュージアム アーク

正会員 磯 崎 新 君  
正会員 小 菅 克 己 君  
正会員 野 島 秀 仁 君

1988年に建てられたハラ ミュージアム アークの増改築プロジェクトである。

今回の工事は、建物本体の計画見直しのみならず、隣接する牧場やアプローチ道路との関係、新たに追加された屋外展示なども含めた施設全体の配置計画の見直しにまで及ぶものであった。既存の美術館が、榛名山山麓のランドスケープの中に自然と一体となるような群造形としてつくられたそのコンセプトを継承しながら、さらに規模の大きな群造形の建築として実現されたものである。

既存の3つのギャラリーに加え、今回新たにつくられたのは、日本の古美術を主に展示する「観海庵」と2つの収蔵庫。現代美術のコレクションとしてますますその規模が大きくなる美術館の大切な財産を保管するための大規模な収蔵庫である。さらには新しい試みとしてつくられた収蔵展示室というものがある。

新たな配置計画によって生まれ変わったこの美術館は、その佇まいの美しさに息をのむ。新たに計画されたランドスケープと建築の関係にも明確な作者の意図が伺える。その美しい群造形を眺められる場所に移設されたカフェからは、既存の2本のギャラリーウイングと象徴的な四角錐の屋根、そして新たに付加されたいくつものボリュームが、周囲の山並みやなだらかな丘陵のランドスケープの中で見事なハーモニーを奏でている。一方で観海庵へ至る長い廊下から眺めるランドスケープは1枚の巨大な絵画のように切り取られ、かつ、次の特別な体験のために観察者の感覚をリセットするものとして作用している。

今回の増築によって、古美術から現代美術に至るまでのさまざまな造形、つまり人間の価値観のあいだをさまよい歩くような体験ができる希有な美術館となった。それらのシークエンスはひとつひとつの体験の間に必ず「自然の景色」という中和剤を挟みながら連続していく。特に観海庵は、美術館の中で最も端に置かれており、そこに至るには黒く長い廊下を歩いていかなければならない。廊下の一面は外部に完全に開放されているため、その開口から目に飛び込んでくる広大な風景で気持ちがリセットされ、かつその明るさの強烈なコントラストでまぶしさに慣れた頃、また漆黒の世界に入っていく。室内の壁はほぼすべて墨入り漆喰で仕上げられ、天井からはトップライトから差し込む自然光を淡く拡散して採り込んでいる。ここに展示されている障壁画は、もともと東京の原六郎邸に移築された三井寺日光院客殿の書院に飾られていたものであることから、その空間を再現し、かつ立って観ている者の視線の高さが、畳に座っている高さと同じになるように、再現空間そのものを床レベルより上げる工夫をしている。

暗さに目が慣れてこの観海庵を出る時、入口に飾られた現代美術の作品が入る時とはまるで違う作品に見えることに驚く。光あふれる自然の環境とホワイトキューブではない漆黒の世界での体験の繰り返しは、濃密な空間体験としてここを訪れる者の記憶に深く刻まれることになる。

環境と建築の詩的關係を高い次元で実現した作品として高く評価されるものである。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。